悔

水野仙子

青空文庫

ある地方の郡立病院に、長年看護婦長をつとめて居るもとめは、今日一日の時間からはなたれると、急に心も體も弛んでしまつたやうな氣持ちで、暮れて行く廊下を靜かに歩いてゐた。

『おや、降つてるのかしら。』

彼女は初めて氣がついたやうに窓の外を見て呟く。冷え〳〵〳〵として硝子のそとに、いつからか糸のやうに細かな雨が音もなく降つてゐる、上草履の靜かに佗びしい響が、白衣の裾から起つて、長い廊下を先へ〳〵と這うて行く。

彼女が小使部屋の前を通りかゝつた時、大きな爐の炭火が妙に赤く見える薄暗い中から、子供をおぶつた内儀さんが慌てゝ聲をかけた。

『村井さん、今し方お嬢さんが傘を持つておいんしたよ。』

彼女はそこで輕く禮を言つて傘を受取つた。住居はつひ構内の長屋の一つであるけれど、『せい／〳〵〳〵』と氣を利かしてお役に立つてみせます』と言つてるやうな娘の心をいぢらしく思ひながら、彼女はぱちりと雨傘をひらく。寸ほどにのびた院内の若草が、下駄の歯に柔かく觸れて、土の濕りがしつとりと潤ひを持つてゐる。微かな風に吹きつけられて、雨の糸はさわ〳〵と傘を打ち、柄を握つた手を霑す。

別段さうするやうに言ひつけた譯ではなかつたけれど、自然自然に母の境遇を會得して來た娘の君子は、十三になつた今年頃から、一人前の仕事にたづさはるのを樂しむものゝやうに、

ひとりでこと〳〵と臺所に音をたてゝゐたりするやうになつた。今日も何やら慌てゝ板の間に音をたてながら、いそ〳〵と母を迎へに入口まで出て來た。

『お歸んなさい、あんね母さん、兄さんから手紙が來てゝよ。』

『さうかい。』

彼女は若々しく胸をどきつかせながら、急いで机の上の手紙を取つて封を切つた。彼女の顔はみる〳〵喜びに輝いた。曲みかげんに結んだ口許に微笑が浮んでゐる。

『君ちやんや、母さんがするからもういゝかげんにしてお置き、兄さんがはいれたさうだよ、よかつたねえ。』と、あとは自分自身にふやうに調子を落して、ぺたりとそのまゝ机の前に坐つてしまつた。今の今まで張りつめてゐた氣が一寸の間ゆるんで、彼女は一時の安心のためにがつかりしてしまつたのである。何かしら胸は誇らしさにいつぱいで、丁度人から稱讃の言葉を待ちうけてゐでもするやうにわく〳〵する。彼女は猶もその喜びと安心を新たにしようとするやうに再び手紙をとりあげる。

彼女の長男の勉は夢のやうに成人した。小學時代から學業品行共に優等の成績で、今年中學を卒へると、すぐに地方の或る專問學校の入學試驗を受けるために出て行つたのである。今更に思つてみれば、勉はもう十九である。九つと三つの子供を遺されてからの十年間は、今自分で自分に涙ぐまれるほどな苦勞の歷史を語つてゐる。子供達の、わけても勉の成長と進歩は、彼女の生活の生きた日誌であつた。さうして今やその日誌は、新しい頁をもつて始まらう

としてゐるのである。彼女は喜びも心配も、たゞそのためにのみして書き入れた努力の頁をあらためて繰ってみて密かに矜りなきを得ないのであつた。

彼女はレース糸の編物の中に色の褪めた夫の寫眞を眺めた。恰もその脣が、感謝と劬はりの言葉によって開かれるのを見まもるやうに、彼女の心は驕ってゐた。その耳の許では、『女の手一つで』とか、『よくまああれだけにしあげたものだ』とかいふやうな、微かな聲々が聞えるやうでもあつた。彼女は醉ふたやうに、また疲れたやうに、暫くは自分を空想の中にさまよはしてゐた。

しめやかな音に雨はなほ降り續いてゐる。少しばかり冷え冷えとする寒さは、部屋の中の薄闇に解けあって、そろ〳〵と彼女を現な心持ちに導いて行く。ぱつと部屋があかるくなる。君子は背のびをして結ばれた電氣の綱をほどいてゐた。とその時、母は恰もその光りに彈かれたやうにぱつと起き上つた。

今は彼女の顔に驕りと得意の影が消えて、ある不快な思ひ出のために苦々しく左の頬の痙攣を起してゐる。彼女は起つて行く。さうして甲斐〳〵しく夕飯の支度を調へてゐる娘をみると、彼女の祕密な悔にまづ胸をつかれる。

やう〳〵あきらかな形となつて彼女に萠した不安は、厭でも應でも再び彼女の傷所――それは羞恥や侮辱や、怒りや呪ひや、あらゆる厭はしい強い感情を持たないでは見られぬ――をあらためさせなければ止まなかつた。彼女はその苦痛に堪られさうもない。けれども黒い影を

翳して漂つて來る不安は、それにも増して彼女を苦しめるであらう。

町の小學校の校長をしてゐた彼女の夫は、一年間肺を病んで、そして二人の子供を若い妻の手許に遺したまゝ死んでいつた。殘つたものは彼女の重い責任と、極僅かな貯へとだけであつた。彼女はすぐに自分自身のために、また子供達の爲めに働かなければならなかつた。彼女は間もなく親戚に子供を預けて土地の病院に勤める身となつた。彼女は脇目も觸らなかつた。二年三年は夢の間に過ぎ、未亡人の操行に關して誰一人陰口を利く者もなかつた。貧しくはあつたけれど彼女の家柄もよかつたので、多少の尊敬の心持ちも加へて人々は彼女を信用した。その間に彼女は産婆の免状も取つた。

彼女が病院生活に入つてから三年目の秋に、ある地方から一人の若い醫者が來て、その病院の醫員になつた。彼は所謂人好きのする男で、殊に院内の看護婦達をすぐに手なづけてしまうことが出來た。彼は、自ら衞ることに嚴かなもとめの孤壘に姉に對する弟のやうな親しさをみせて近づいて行つた。彼は彼女よりも二つばかり年下なのであつた。いつの間にかぱつと二人の關係が噂さにのぼつた。噂さが先きか、或は事實が先きか——それはとにかく魔がさしたのだと彼女はあとで恥ぢつゝ語つた——間もなく彼女が二人の子供と共に、院内の一室に若い醫者と起き伏しゝてゐることは公然になつた。院長の某が媒ちをしたのだといふ噂さもあつた。人々はたゞ彼女も弱い女であるといふことのために、目を蔽ひ耳を掩うて彼女を許した。けれどもそれは「あの人さへも——？」といふ絶望を意味してゐた。

二人の關係の眞相が、どんなものであつたかは誰も知らない。恐らくは彼女自身にもわからなかつたことであらう。彼女は見事に誘惑の甘い毒氣に盲ひたのである。

三ヶ月ばかり過ぎると、彼女は國許に歸つて開業するといふので、新しい若い夫と共に、この土地を去るべくさま／〳〵な用意に取りかゝつた。彼女は持つてゐるものを皆捧げた。いよ〳〵といふ日が來た。荷物といふ荷物は、すつかり送られた。まづ男が一足先きに出發して先方の都合を整へ、それから電報を打つて彼女と子供を招ぶといふ手筈であつた。彼女は樂んで後に殘つた。さうして新生涯を夢みながら彼からのたよりを待ち暮した。一日、一日と經つて行く。けれどもその後彼からは何の端書一本の音信もなかつた。——さうしてそれは永久にさうであつた。

不幸な彼女は拭ふことの出來ない汚點をその生涯にとゞめた。さうしてその汚點に對する悔は、彼女の是までを、さうしてまた此先をも、かくて彼女の一生をいろ〳〵に綴つて行くであらう。

恐ろしい絶望の夜を呪ひと怒りに泣きあかした時、彼女はまだ自分を悔ゐてはゐなかつた。たゞ男を怨んで呪ひ、自分を嘲ひ、自分を憐み、殊に人の物笑ひの的となる自分を思つては口惜しさに堪へられなかつた。彼女に若しもその時子供がなかつたならば、呪ひや果敢なみや、たゞ世間をのみ對象にして考へた汚辱のために、如何にも簡單に死んでしまつたかも知れない。

人の噂さと共に彼女の傷はだん〳〵その生々しさを失ふことが出來たけれど、猶幾度となくその疼みは復活した。彼女は靜かに悔ゐることを知つた。それでも猶その悔には負惜しみがあつた。彼女はその時自分の境遇をふりかへつて、再婚に心の動くのは無理もないことだと自ら裁いた。それを非難する人があつたならば、彼女は反對にその人を責めたかもしれない。それからまた彼女は、自分自身のことよりも、子供の行末を計つたのだつたといふ犧牲的な（自ら思ふ）心のために、自ら亡夫の立場になつて自分の處置を訐した。結極男の不徳な行爲が責められた。さうしてたゞ欺かれた自分の不明に就いてばかり彼女は恥ぢたのである。

しかしその後、彼女は前にも増して一層謹嚴な生活を送つた。人々は彼女に同情を寄せて、そして二人の孝行な子供を褒め者にした。誰も今はもう彼女の過去に就いて語るのを忘れた。彼女の奮闘と努力は、十分に昔の不名譽を償ふことが出來た。時にはまた、あの恐るべき打撃のために、却て獨立の意志が鞏固になつたといふことのために、彼女の悔は再び假面をかぶつて自ら安んじようと試みることもあつた。彼女の悔はいつも反省を忘れてゐたのである。

月日と共に傷の疼痛は薄らぎ、又傷痕も癒えて行く。しかしそれと共に悔も亦消え去るものゝやうに思つたのは間違ひであつた。彼女は今初めて誠の悔を味はつたやうな氣がした。さうしてそれは何といふ恐ろしいものであつたらう。

——彼女が勉の成長を樂しみ過した空想は、圖らずも恐ろしい不安を彼女の胸に暴露して行つた。無垢な若者の前に洪水のやうに展ける世の中は、どんなに甘い多くの誘惑や、美しい蠱

惑に充ちて押し寄せることだらう！　外れるな、濁るな、踏み迷ふなと、一々手でも取りたいほどに氣遣はれる母心が、忌はしい汚點の回想によつて、その口を縫はれてしまふのである。さうしてそれよりも猶彼女にとつて恐ろしいことは、一人前になつた子供が、どんな風に母親のその祕密を解釋し、そしてどんな裁きをそれに與へるだらうかといふことであつた。

憐れむだらうか？　厭ふだらうか？　それともまた淺猿しがるだらうか？　さうしてあの可憐しくも感謝に滿ちた忠實な愛情を、猶その愚かな母に對してそゝぎ得るだらうか？　あゝ若しもさうだとしたならば——？　彼女はたゞ子供のために無慾無反省な愛情のために、自分は着るものも着ずにこれまでにして來たのであるものを。

彼女の恐怖は、今までそこに思ひ到らなかつたといふことのために、餘計大きく影を伸して行くやうであつた。彼女は新たなる悔を覺えた。赤裸々に、眞面目に、謙遜に悔ゐることの、悲痛な悲しみと、しかしながらまた不思議な安かさとをも併せて經驗した。彼女が今までの悔は、ともすれば言ひ譯の楯に隱れて、正面な非難を拒いでゐたのを知つた。彼女は今自分の假面を引剥ぎ、その醜さに驚かなければならなかつた。今こそ彼女は、亡き夫の靈と純潔な子供の前に、たとへ一時でもその魂を汚した悔の證のために、死ぬことが出來るやうにさへ思つた。

天にでもいゝ、地にでもいゝ、縋らうとする心、祈らうとする希ひが、不純な沙を透して清くとろ〳〵と彼女の胸に流れ出て來た。

君子が不審しさに母親の容子に目をとゞめた時、彼女は亡夫の寫眞の前に首を垂れて、靜かに、顔色青褪めて、身じろぎもせず目をつぶつてゐた。

雨はます〳〵小降りになつて、そして風が出た。木の葉の露が忙しく搖り落される。（をはり）

青空文庫情報

底本：「淑女畫報」博文館
　　1915（大正4）年9月号
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：小林徹
校正：林幸雄
2001年5月15日公開
2006年4月19日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

悔

水野仙子

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/